

「砂漠には何もない」のか？

ーサハラ沙漠での断食で考えたことー

慶應義塾大学政策・メディア研究科修士課程 小林 周

「…そのくせ僕らは砂漠を愛したものだ」——『星の王子様』の著者サン＝テグジュペリの随筆『人間の土地』に記されていたこの一節が、昔から妙に僕の心を捉えていた。

大学院で北アフリカ地域、特にリビアの現代情勢について研究を行う僕が、煩雑な入国許可の手続きを終えてリビアを訪れる機会を得たのは、昨年（2008年）の夏のことだった。3週間の滞在で、当初は首都トリポリの周辺、つまり地中海沿岸のみに滞在する予定であったが、現地の旅行会社の手配により、思いがけなく南部の沙漠地帯へのツアーが組み込まれることになった。

リビア南部のハブとなっているセブハ空港に到着し、飛行機のタラップを降りたときの、まるで巨大なドライヤーを全身に当てられているかのような、強烈な熱風を今でも覚えている。空港からトヨタの四輪駆動車に乗り込み、早速沙漠を目指す。運転手の青年は炎天下の熱気を気にする風もなく車のハンドルを握っている。窓の外の風景が市街地から岩の混じった砂地に移り変わると共に、少しずつ心が落ち着かなくなってくる。普段日本で目にする風景とは全くと言っていいほど異なる風景が広がりつつある。不意に車が大きく道から外れ、道路沿いに続いていた砂丘を駆け上り、そして砂丘を乗り越えた瞬間、僕は息をのんだ。これまで視界に入っていた道路や建物、まばらな草木は消え失せ、目の前に広がるのは、地平線まで続く砂の世界と、雲ひとつない青空、そしてキラキラと照りつける太陽だけだった。

「…何にもない」おもわずそんな言葉が口をついて出た。そこには、僕の日常になじんだ全てのものがなかった。空や太陽さえも、沙漠の上ではひどく凶暴なものとして僕の目に映った。ひょっとしてこのまま気が狂ってしまうのではないかとさえ思いもした。車を降り、熱い砂の上を裸足で歩いてみる。粒が細かく、手に取ればさらさらと流れていく微小な砂粒がいったいどれほど集まって、地平線まで続くサハラ沙漠を構成しているのか、まるで見当もつかない。

砂丘を散策したり、車を作るわずかな日陰で休んだり、我々はそれぞれに時を過ごす。視界に入るものが沙漠と空と太陽しかないため、時間の感覚が著しく鈍くなるが、気付くと太陽は位置を変え、空は赤く染まり、熱風は穏やかなものになりつつあった。運転手とガイドが手際よくテーブルや椅子を組み立て、同行のコックが作った出来たての料理を並べる。

そして、我々も席に着いたのだが、ここで僕は今回の訪問における、ある事実の重大さを突き付けられた。それはリビアを訪れた2008年8月末という時期が、イスラームにおける「ラマダーン月」に該当していたということだ。この時期の日の出から日没まで、イスラーム教徒には断食が宗教的な義務として求められるわけだが、真夏のサハラ沙漠のど真ん中においても、それは例外ではない。

イスラーム教徒ではない僕は、もちろん断食を宗教的な義務として行う必要はない。しかしながら、リビアはいわゆる「イスラーム圏」に属し、ガイドや運転手などのリビア人は全員イスラーム教徒である。そして今回の訪問に同行した大学の研究会の中にもイスラーム教徒の方がいた。こうなれば僕もアラブ・イスラーム圏を研究する身として、彼らとともに断食を行わないわけにはいかない。中東地域を研究する以上、イスラームに関する知識も関心もある程度は持ち合わせてはいたものの、まさか人生最初の断食体験を真夏のサハラ沙漠で迎えることになるとは夢にも思っていなかった。

そういうわけで、目の前には出来たての美味しそうな料理と飲み物があるにもかかわらず、我々はイスラームの戒律に則り日が沈むまで手を付けることができない。空腹はともかく、昼間からの喉の渇きで目は充血し、口の中はカラカラになり、手足がブルブルと震えてくるのが分かる。太陽はもはや遠くにそびえる砂丘に隠れて見えないが、イスラーム教徒である同行のリビア人達も研究会メンバーも、まだ飲み物に手を付けようとしない。食卓に着いてから時間にすれば10分ほどだったかと思うが、まるで数時間が経過したかのような感覚に陥った。気が遠くなりかけたとき、ようやく日没を確認したリビア人ガイドから声がかかり、許しを得た我々は一心不乱にぬるくなったジュースを飲み干し、豪勢なりビア料理を気の済むまで堪能した。これほどまでに「食べる」「飲む」ということのありがたみを痛感したことはなかった。ようやく満腹になって人心地がついた頃には、周囲は宵闇につつまれ、足元の砂からは昼間に蓄えられた太陽の熱も抜け、耐えがたい熱風の代わりに心地良く涼しい風が沙漠を通り抜けていた。

砂の上に横たわると、視界を満天の星空が覆う。新月のために月明かりはないが、それでも十分に明るい。夜空のあちこちを滑るように流れていく星々。小さなランプが微かに周囲を照らす以外は、夜の闇と、耳が痛くな

るほどの静寂が我々を包み込む。昼間とはまるで違う、静かで穏やかな夜の砂漠がそこにはあった。

友人たちの会話から離れ、静寂に包まれながら、僕はサン＝テグジュペリの言葉を思い出していた。彼はかつてサハラ砂漠内で遭難し、生死の境をさまよったという。そのような人間が、なぜ沙漠を愛するなど口にできるのだろうか。昼間、灼熱の沙漠に身を置いては全く理解のできなかったことだが、こうして夜の沙漠に身を置いていると、彼の気持ちがわずかながらも伝わってくるようにも思った。

普段都市の喧噪のなかに暮らす我々は、あまりにも多くのものを所有し、あまりにも多くの所属や制約に縛られ、単なる「自分自身」であることができない。常に五感が刺激され、常に何かに急かされ続けながら日常を送っている。そのような中、僕は短い時間ではあるが沙漠を訪れ、昼間の凶暴な灼熱に脆弱な人間としての自身の姿を突き付けられ、日没前のわずかな時間に飢えと渇きに苦しんだ。そして夜、風に流れる砂丘の上に身を横たえている。

「今こうしてここにいる僕は、世界中に何一つ所有しない僕だった。僕は、砂と星とのあいだに方途を失って、ただわずかに呼吸することの心地よさ以外には何ものも

意識しない一個の人間でしかなかった」サン＝テグジュペリの別の記述を思い出しながら僕は、自分が沙漠を訪れ、つかの間の断食を行うことで何を得て、何を取り戻したのだろうかと思案と考えていた。

夜の闇はさらに深まり、目を閉じると、静寂、砂粒の細かな感触、沙漠を渡る夜風しか感じられなくなる。そして唐突に気付いた。昼間、灼熱の中で感じた「沙漠には何も無い」などという考えは全くの誤解であったのだと。見渡す限りの沙漠。雲ひとつない空。照りつける太陽。夜空を覆う星々。沙漠を渡る風。それら全ては最初から僕を取り巻いていた。ただ、僕が意識しなかっただけなのだ。

沙漠は、現在僕らの目の前にある姿で、遙か昔からそこにあり続けていたのだし、恐らくこれからも、人間の都合などお構いなしに、これまでのように存在し続けていくのだ。だからこそ、サハラ沙漠のど真ん中で僕はあれほど疲弊し、空腹と喉の渇きに苦しみ、そして形容しがたい安らぎを得たのだろう。

「砂漠には全てがある」首都トリポリの街中で出会った、普段は沙漠に住んでいるという老人の言葉が、今も強く印象に残っている。